【77】

氏　名（本籍）	岩出（いわで）　ま　ゆ（東京都）
学位の種類	博　　士（芸術学）
学位記番号	博　甲　第　3624　号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	**西洋古代末・初期ビザンティン時代の建築における大理石化粧張りの研究**

主　査	筑波大学教授	工学博士	日　高　健一郎
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	金　田　千　秋
副　査	筑波大学教授		蓮　見　　孝
副　査	国士舘大学教授	博士（工学）	岡　田　保　良

論文の内容の要旨

（構成）

本論文は次の構成をもつ。

序

1章　同時代史料に見る建築と大理石

2章　大理石をめぐる古代ローマ時代からの伝統

3章　古代末・初期ビザンティン時代の建築における大理石化粧張りの事例

4章　大理石をめぐる伝統の継承と変容

5章　結－建築史の流れにおける位置付け－

これに，詳細な脚注，参考文献，地図4点，計160点の写真，図版が加わる。

（概要）

研究の背景，既往研究，目的と特色，構成と内容，語義と表記について説明する序に続き，1章では，建築意匠材としての大理石が古代および初期ビザンティン時代の史料でどのように記述され，表装化粧材としてどのような評価と価値観を伴って建築に用いられたかが，史料研究として論じられる。大理石の化粧張りへの適用を特色とする建築文化は，古代ローマで確立され，ビザンティン様式へと継承されるが，同時代史料の記述から色彩や模様に対する思考が時代と共に変化し，古代ローマ時代の伝統継承と共に初期ビザンティン時代特有の趣味と価値観が誕生したという史料研究の成果が導かれ，それが2章以降の研究の基本的前提となっている。

続く2章では，ローマ時代の様々な建築遺構に見られる大理石の産地と種類，加工・施工技術，生産・流通状況が整理され，大理石による建築意匠が論じられる。大理石の種類，呼称は100から200種と不統一であるが，著者は，岩石学や建築学の呼称を古文献を含めて整理し，建築材料として21種の大理石を同定している。2章の結論として，著者は，ヘレニズム・ローマ期の壁面装飾パターンを七種類に分類し，ヘレニズム由来の壁面構成が高価な大理石装飾を求めたローマ建築で多色化，意匠化，パターン化されたという事

実を指摘している。

3章では，4から6世紀の事例を取り上げ，大理石化粧張りの現地調査と現状記述が展開される。4，5世紀の事例では，大理石化粧張りの意匠において，ローマ時代の水平区分が維持されつつ，模様やパターンの組み合わせが多様化したことを論じている。4世紀の6例，5世紀の5例に加え，6世紀の事例研究ではハギア・ソフィア大聖堂とサン・ヴィターレ聖堂が特に詳しい考察の対象とされる。

ハギア・ソフィア大聖堂に関しては，現地調査による現状，19世紀半ばの大規模な修復の記録等から堂内の大理石表装の配置計画と意匠的特徴，当初装飾板の規格と施工の特徴を列挙，分類し，堂内各空間でその機能と重要性に応じた表装が工夫され，ギャラリー，側廊，ナルテックス，身廊，身廊西面，アプスという流れで装飾の豊かさと複雑さが増大したと結論付けている。ローマ建築で生まれ，洗練された大理石化粧張りがビザンティン建築の最高傑作の中で抽象性を帯びつつ壁面装飾としての頂点をなすまでに高められ，その後の化粧張り装飾の基盤となったことが実証的に示されている。

著者はラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂でも堂内8基のピアについて大理石化粧張り（1基あたり約150枚）の詳細な調査を実施し，その図面化，視覚化を工夫して同聖堂の修復史と対応させつつ，大理石の劣化状況を正確に記録している。この調査と記録により，ビザンティン帝国副首都の重要建築においても化粧張りの多色化，文様化が進行したことが確認されている。

4章では，史料研究（1章）と遺構に基づく研究（2，3章）が総合化され，大理石化粧張りにおいてローマ建築から継承された特質，ユスティニアヌス帝時代の特質と意味，この古代最後の栄光に続く中世初期への影響が論じられる。大理石化粧張りは，単なる装飾表装に留まらず，特に初期ビザンティン時代では，地域的，社会的，宗教的な背景を建築内部空間に反映した「歴史史料」であった。皇帝権との一体化によってキリスト教の宗教的権威が揺るぎないものとなると，かつてローマ建築で比較的具体的な意匠を与えられていた大理石化粧張りは，抽象化の度合いを高め，文様の繰り返しとともに標準化と平面性が進む。しかし，一方で，宗教建築の重要な部分には手の込んだ貴重大理石による化粧張りが適用され，この共有部分における単純化と重要部分における入念化の対比こそがユスティニアヌス帝建築を頂点とする初期ビザンティン建築における大理石化粧張りの最大の特徴であり，後者すなわち華麗な装飾がこの時代で失われるのに対し，前者は簡略化，平面化を伴って中世に継承されてゆくという流れがこの論考の結論として提示される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，地中海域の歴史的建築物にとって重要かつ不可欠な建築材料であった大理石を研究対象とする注目すべき論考である。これまでの西洋建築史研究は，西洋美術史の様式論，方法論に大きく影響され，建築という研究対象が有する特殊性，特に建築材料の造形性と意味に関する分析と考察を軽視する傾向が見られた。材料そのものを直視するのではなく，作り出された空間と建築作品の芸術的意味が，主として様式を基盤として論じられてきたのである。本論文は，建築行為の原点に返り，当然の与件としてともすれば看過されてきた材料の特性と建築意匠の関係を，西洋古代末・初期ビザンティン時代の作例を対象として同時代史料と遺構現地調査の両面で追究し，ユスティニアヌス帝の輝かしい建設事業における大理石化粧張りが古代と中世の建築装飾を繋ぐ重要な一時代をなしたことを証明しようとしている。大理石に注目すると，古代から中世へという大きな時代の移行の中で，古代から継承されつつ初期ビザンティン時代に失われ，変容した要素と，古代から継承されてそのまま中世建築の基層となった要素が分かれたと著者は指摘する。古代の大理石使用が洗練さと多色化の傾向を強めて頂点を迎えたユスティニアヌス帝時代は，この中世への分岐が始まった時代でもあり，大理石化粧張りという建築表装技術に注目して，従来の建築史が描ききれなかったユスティニアヌス帝時代の建築の特性をみごとに指摘した好論文である。

1章で展開される文献調査は広い範囲におよび，かつ緻密であり，史料研究としての水準は高い。建築石材としての大理石の歴史に関する史料研究はノーリの研究を除いてこれまでなされたことがなく，本章の網羅的集成は今後の建築大理石研究にとって重要な基礎資料となる。この章に関する参考文献は多量で，その関連箇所の抽出・整理には多大の労力を要したことが窺われる。

2章，3章は現地調査にもとづく研究であり，一転して著者の鋭く正確な観察力とデータ処理能力が発揮される。史料研究と遺構の研究が効果的に融合し，建築石材としての大理石の諸相を解明している点も本論文の大きな特色である。岩石学，建築学，そして建築史学では，大理石の呼称についてすら，表記の統一が図られることもなく，さらに，大理石生産・流通業界での通称が材種呼称の混乱を増幅しており，大理石研究はこうしたきわめて基本的な語彙整理から始まらなければならない。著者が2章で種類，産地，呼称を整理している意義は大きく，これまで建築史研究で大理石が敬遠されてきた理由の一つがこれで消失したといえる。

3章の現地調査は，いずれも総合建築調査にメンバーとして著者が参加し，調査活動の中で自らの大理石研究の成果を蓄積したもので，論文はこの現地調査により，さらに確実かつ具体的な実証性を獲得している。ハギア・ソフィア大聖堂の大理石化粧張りに関する論述は約20ページに及び，特に，この章の「表1」は，既往研究を比較してその欠陥や不足部分を補い，新たに同大聖堂内部の化粧張りをまとめたもので，今後の関連研究にとって便利かつ有用な典拠となるであろう。

サン・ヴィターレ聖堂の詳細な調査では，同様に同聖堂に関する今後の建築史研究にとって重要な基本資料になりうる正射投影図による劣化状況記録が作成されている。本論文は，研究対象の設定と方法論，論の展開と結論のいずれにおいても独創的であり，学術的貢献をなすといえるが，同時に，これまで未開拓であった古代・初期中世の地中海世界における大理石使用に関するさまざまな情報を整理，総括している点も見逃せない。サン・ヴィターレ聖堂に関する修復史を踏まえ，現状の劣化と対応させて当初の大理石化粧張りの状態を復元しようとする試みは，装飾石材の今後の研究にとって重要なデータであり，同時に大理石研究の一翼となる現地調査の方法を提示している。

本研究によって直ちに総合化され，建築史研究の新たな地平を切り開いたというにはなお，いくつかの課題が残る。例えば，建築遺構の残存状況から，研究対象はほぼ宗教建築に限られ，重要典型例の考察となっている。しかし，地中海沿岸域の宗教建築の残存例は膨大であり，特に中近東，北アフリカには，初期ビザンティン時代の作例が数多く残る。政情や宗教的理由から研究の遅れが著しいこの地域での調査と分析は，今後の大きな課題である。ビザンティン考古学の全範疇を対象とするスケールの大きな研究となるが，大理石という特徴的な石材を通して，広域に広がる建築文化の基層に迫ろうとする著者の展望は，学術的に大きな可能性を有している。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。